かずさの博物誌

キリギリス

～炎天下に鳴く～

文・写真／成田篤彦

2017.7.20

炎暑の水田地帯、稲の花がもう咲いています。しかし、驚いたことに、人っ子一人いません。チョウもトンボも飛んでいません。

アスファルトが溶けだしそうな暑さで頭がくらくらします。

カーブを曲がったとき、「ギィエー、ギィエー、」と虫の音が耳に入ってきました。

「キリギリスの鳴き声？」と耳を側立てましたが、特徴ある鳴き声の「チョン」が入っていません。しばらく、待つと「ギィエー、チョン、ギィエー、チョン、」と鳴き続けました。聞き間違えようのないキリギリスの鳴き声です。田舎のひなびた味わいのある鳴き声です。

この場所は三十年以上通っていますが、キリギリスの鳴き声を聞いたのは初めてです。

おそらく、七月十日前後は仕事が忙しく訪れる機会がなかったからかも知れません。鳴き声を頼りに、ススキの草原を探って行くと二匹のキリギリスのオスが草につかまりながら逆さで鳴いていました。

この情景を詠った句があります。

きりぎりす草原の暑をたたへけり
阿部ひろし　酸漿

草原や烈日たたへきりぎりす
阿部ひろし　酸漿

きりぎりす
まひるさみしさきはまれり
坂間晴子

（松田ひろむ編集『ザ・俳句十万人歳時記』第三書館）

捕まえようと草をかき分けていくとどんどん地面の方に逃げていき、草が邪魔で捕れません。脚で道に追い出そうとしますが、決して出てきません。二日目にようやくとらえて写真を撮りました。

たっぷりとした体で、美しい緑色をしていて、とても魅力的な虫です。

テレビやゲーム機のなかった時代の子供たちはこの虫を捕まえるのに夢中になったものです。

きりぎりす児は脛傷で帰りけり
井上椋月

（松田ひろむ編集前出）

さて、昔の縁日では虫かごに入れたキリギリスを売っているのを見かけました。近年でもたまに道の駅で売っていたこともあります。

今でもスズムシやマツムシは美しい声で鳴くので、よく飼育されます。一方、キリギリスはどういうわけか、近頃はあまり飼育されません。しかし、万葉の時代からその鳴き声の野趣や素朴さが買われ、鳴く虫の代表的な存在でした（松浦一郎著89『鳴く虫の博物誌』文一総合出版）。人々が、キリギリスを飼うのは鳴き声で農村の平和な感じを味合うことにあったのでしょう。

文頭に書きましたが、キリギリスは季語では秋ですが、実際は真夏の炎天下に鳴く虫です。夜も鳴きますが、暑くなればなるほど力強く鳴きます。

今がこの虫の声を鑑賞する絶好の機会です。上総でもキリギリスは少なくなりましたが、きっと皆さんの周りにもいるのではないかと思います。この夏、キリギリスの鳴き声を味わってはいかがでしょうか？

▶キリギリスの生息地＝二〇一七年七月七日
木更津市

◀キリギリスのオス＝二〇一一年七月十一日
木更津市

◀キリギリスのメス＝二〇〇六年九月七日
富津市

memo

キリギリス
バッタ目キリギリス科

体長二十六～三十七ミリ。緑色型と褐色型がある。川原や海岸や土手の草地に多い。千葉県に分布するのはヒガシキリギリスとよばれ、青森県以南と岡山県、兵庫県まで分布している。ススキやセイタカアワダチソウの群落などにいる。千葉県では近年数が減少している。四月ごろ、ふ化し、幼虫は共食いをする。成虫期は七～九月。

参考文献　千葉県の自然誌6巻

◎写真・文章の無断転載を禁じます。